

シンポジウム 「近代日本の『神話』とナショナリズム」

2008年3月8日(土)、九州国際大学において、同大学教養学会の主催、経済研究センターの後援により、「近代日本の『神話』とナショナリズム」と題するシンポジウムが開催された。

その主題は、近代日本の「神話」とその変容の歴史的意味を検討することにあった。近代社会には、古代以来の伝統的な「神話」と異なる近代に固有な「神話」(=「起源神話」)があり、それは時代の展開とともに変容してきた。このような「神話」の史的展開は、近代国家の存在自体を理念的に正当化する役割を果たすとともに、ナショナリズムを醸成する酵母として機能した。この歴史的意味を広い視点から考えようとするのが、本シンポジウムのねらいであった。

パネラーとして3名の方々においでいただいた。宮澤誠一(九州国際大学経済学部：当時)は「近代日本の「起源神話」の創出と変容」を、また、成田龍一(日本女子大学人間社会学部)は宮澤報告を強く意識した形で、「近代日本の『神話』と神話崩し」を、それぞれ報告した。このふたつの近代日本に関する報告を前提として、井野瀬久美恵(甲南大学文学部)はイギリス近現代史の視点からコメントをおこなった。

まず、近代日本の「神話」を正面から取り扱ってきた宮澤誠一は、天皇の神権的権威と公議輿論の尊重という相矛盾する様相を統合する「起源神話」の誕生とその後の展開について報告した。この神話が、後の「大正維新」、「昭和維新」と呼ばれる変革運動の際につねに立ち返るべき原点であり、運動の参照系として用いられたことが主張された。しかし、それらの運動においては、オリジナルの起源神話に含まれる諸要素が、それぞれの運動に好都合な形で組み替えられて神話の「再創造」がなされたこと、また、その「再創造」が独自の運動の

ベクトルを生み出し、社会の変革力となったことが強調された。

続いて、近年、近現代における歴史意識と歴史叙述の関連についての成果を精力的に発表されている成田龍一に、歴史認識と歴史意識というより広い視点から、この「神話」の創造と再創造の位置づけについてご報告をいただいた。成田は宮澤の今回の報告とこれまでの業績を強く意識しつつ、起源神話の問題をより広く国民国家形成期における歴史学の役割や「戦後歴史学」の位置という視点から検討した。とくに、神話の「創造」や「再創造」ばかりではなく、「神話崩し」がもった意味合いについて意識的に言及し、興味深い論点を提起した。

最後に、井野瀬久美恵は比較史の視点から、ヨーロッパ、とくにイギリスにおける近代国家の神話形成と近代日本の場合とを比較検討するコメントをおこなった。とりわけ、イギリスにおけるナショナル・アイデンティティの形成のなかで排除されたものたち、あるいは「統合されないままにいる」ものたちの位置に焦点をあてる形で論点が提示された。また、神話の作られ方における、戦争、君主(天皇と英国王)、帝国、「市民」の役割についても関説された。図像を用いた報告は諸論点をイメージ豊かに浮かび上がらせ、ナショナル・アイデンティティ形成と表象との関係がわかりやすく解説された。

これらの報告を通じて、近代日本の「神話」はどのようにして形成され、どのような変容をこうむったのか、その歴史的特質とはなにか、また戦後日本において人々はこの「神話」の呪縛から自らをどのようにして解放とうとしたのか、さらにそれらはグローバルな文脈のなかでどのように位置づけることができるのか、このような問題が検討されるとともに、日本におけるナショナリズムの特質について、いくつかの興味深い論点が提示された。

その後、報告とコメントを受けた討論がなされたが、そこでは主に次のような論点をめぐって議論がなされた。

- 1 「起源神話」の多面性をどのように捉えるか。天皇制批判などの相反する

ものすら含みうるような力をどのように理解したらよいか。

- 2 「起源」神話理解においては、宮澤報告の「はじめに」に本質的なことがすべて含まれているのではないか。その始原性を理解すべきではないか。
- 3 「第二神話」という事実の系譜と、「第二の神話」という表象の系譜を分けて議論すべきではないか。
- 4 「起源神話」はナショナリズムの神話といえるかどうか。また、天皇制神話と近代日本の神話とは同じものと考えていいのか。両者にはずれがあるのではないか。
- 5 「史実」と「虚構」とは截然と区別しうるのか。その区別はむずかしいのではないか。心的事実と制度的事実の区別についても考えるべきではないか。
- 6 「神話崩し」のなかで、新たな神話が作られている問題の指摘は重要である。
- 7 「大逆事件」は「転機」とされているが、どのような意味において転機か。その意味合いについてはもっと詰めるべきではないか。
- 8 なぜ、「明治維新」が起源か。天皇制を問題にするのであれば、本来の起源(BC660年)の方がもっと重視されてもおかしくないにもかかわらず。
- 9 起源神話の分析方法とポストモダンの分析方法とはどのように重なるのか、重ならないのか。

いずれについても必ずしも十分な議論が展開できたわけではないが、今後の新たな検討課題を示すことはできたように思える。

最後になったが、急なお願いにもかかわらず、ご多忙のなか遠路はるばるこのシンポジウムのために北九州においでいただいた成田龍一氏と井野瀬久美恵氏には、心よりお礼を申しあげたい。お二人のご厚意とご尽力なしには、このシンポジウムを組織することはできなかった。記して謝意を表したい。

また、当日は寒い中、議論が長時間にわたったにもかかわらず、参加者のみ

なさまには最後までおつきあいいただいた。さらに、準備に当たって教養学会の諸氏には多大なご協力をいただいた。末尾ながらお礼を申し上げたい。

企画から実施まであまり時間的な余裕がなかったが、みなさまのご協力によって、今回のシンポジウムを開催することができた。こうした学術シンポジウムの継続的な開催が、九州国際大学における教養教育を下支えする知的鉱脈となりうることは贅言を要しない。教育と研究の高いレベルにおける統合を可能にするような知的な努力が、今後も継続されなければならない。

(三笥利幸、倉田 剛、高田 実)